

# 言葉との邂逅

飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ

井村和清著 祥伝社

## 小石までが輝いて見えるのです

自分の命は、もう長くない。

そのことを知ったとき、人は、どのような思いに駆られるのか。

それは、おそらく、実際にそれを経験した人間にしか分からない。

経験のない人間に想像できるのは、刻々近づいてくる死への恐怖に駆られ、肉親と別れる

ことの悲しみに沈み、自分を襲った不幸を嘆き、絶望と混乱の中

で、最後の時を生きていく。そうした人間の姿であろう。

しかし、この書を読むとき、死を覚悟した人間が、実は、一つの不思議な光景を見ることを、

教えられる。

井村和清医師。三〇歳のある日、突如、右膝に巣食った悪性腫瘍

が診断される。直ちに転移を防ぐために右足を切断するが、そ

の甲斐なく、腫瘍は両肺に転移。

数ヶ月の命を宣告されながらも、最後まで希望を捨てずに生き、

三三歳の若さで他界する。

その井村医師が、死を覚悟し、精一杯に生きた最後の日々、愛

する家族に向けて思いを綴った手記が、この書である。

では、死を覚悟した人間が見る光景とは、何か。

そのことを教えてくれるのが、腫瘍の転移を知り、死を覚悟し

て帰途についた日の夕刻、井村医師が見た光景である。

「その夕刻、自分のアパートの駐車場に車をとめながら、私は

不思議な光景を見ていました。世の中が輝いてみえるのです。

スーパーに来る買い物客が輝いている。走りまわる子供たちが

輝いている。犬が、垂れはじめた稲穂が、雑草が、電柱が、小

石までが美しく輝いて見えるのです。アパートへ戻って見た妻

もまた、手を合わせたいほど尊くみえたのでした」

自分の命は、もう長くない。そのことを知ったとき、日常の

何気ない光景さえも、光り輝いて見える。

その光景を、私もまた、見た。それは、井村医師がその光景を

見た、数年後のことであった。医者から命の長くないことを

伝えられた自分が見たのも、やはり、光り輝く光景であった。

自分の足元が崩れてゆく感覚の中で、目の前にある日常の世

界が、奇跡のように尊い世界であることを感じ、すべての物事

が光り輝いて見えた。

何かの不思議な配剤により、その命を長らえ、二五年の歳月

を生きてきたいまも、そのときの

光景は、心に焼きついている。いや、いまも、毎日のように、

その光り輝く光景を、見る。なぜなら、この書の中で引用さ

れたショーペンハウエルの言葉のごとく、我々は、誰もが、必

ず到来する最期の日を持つ死刑囚。百年にも満たない一瞬の生

を駆け抜けていく、儂い存在。そのことに気がついたとき、誰

にとっても、目の前の日常の世界が、かけがえのない光を放ち、

輝き始めるのだろうか。



田坂広志  
多摩大学教授 ソフィアバンク代表

# BOOK